
HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN! 5

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！ 5

【Nコード】

N9303U

【作者名】

cocconeko

【あらすじ】

同タイトル「HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！」の続編です。

前作四話目 <http://ncode.syosetu.com/n9902i/>

第一話 <http://ncode.syosetu.com/n5896a/>

個人サイト「空浸食」にも掲載しております。

若干八歳の元気少女と、見た目は青年でも中身は老人な賢者兼聖剣

の凸凹コンビが織りなす冒険活劇。相変わらず楽しく苦労する予定
です。

道標と王様とそれからね（前書き）

前作から間があいてしまいましたが、ようやく始動します。
キヤルとセインの冒険に、またお付き合いいただけたら幸いです。

道標と王様とそれからね

「さあさあ祭りだ！祭りだよ！泣く子も子鬼も出ておいで！」
派手な化粧を施した道化師が、楽隊を引き連れて空に向かってピラをばら撒く。

ざわざわと騒がしい大通りには、色とりどりの花びらが舞い、行き交う人々の頭上に降り注ぐ。

石畳の上を子供たちが駆け回り、大人は路上に並んだ出店を覗き込んで、品定めに忙しい。

「今日は王様のパレードがあるんだって！」

「明日は神殿で奉納祭があるらしいよ」

壁に飾られた花々と、飛び交う笑い声。

町は華やかな活気に満ちていた。

そんな町の騒ぎとは一画離れた場所で、フェナンシエを頼張りながらお茶を飲み、ゆったりとした時間を楽しむ青年と老紳士の姿があった。

「皆、楽しそうだね」

「そうですね。久々の祭りですからな」

眼鏡をかけた細身の青年と、老いてなお矍鑠とした老紳士は、一見穏やかに談笑している。

大きな庭に囲まれた、堅牢そうな屋敷の一階にある、小さなこの部屋は、はるか昔にこの屋敷を建てた人物が、自分の友人にあてがったものだ。

庭に面し、突き出したように広がるテラスの大窓は、そのまま扉にもなっていて、開け放てばゆったりと庭を眺める事が出来る。

そのテラスを眺めながら、テーブルを挟んで向かい合わせに二人の会話は続く。

「貴方様の祭りだそうですね？」

紳士が、青年の顔を覗き込むように言った。

「うん。聞いた」

紅茶の注がれたカップを見つめながら、青年はうなづく。

「うちの道楽好きが、せっかくだからと私の言う事も聴きませんなでな」

老紳士が、ロマンスグレーの頭髪と同じ色の口髭をゆらし、深々と溜め息を吐いた。

「…誠に申し訳ありません」

「いや、君のせいじゃないし、どうせ僕、城に行かなきゃいけないし」

にこりと微笑むその青年の笑顔が、心なしか恐ろしいものに見えるのは気のせいではないだろう。

「セインロズド復活祭とか、国王はよほど暇と見えるよね？」

穏やかな表情、穏やかな声音で、青年は怒っていた。

「返す言葉も見つかりませんな」

老紳士はフェナンシエをつまんで、口の中に入れる前に、またひとつ、溜め息を吐いた。

「あ！二人して美味しそうなもの食べてる！」

金髪をふわふわと揺らし、少女が庭に面したテラスから顔を出した。

「キヤルが呼んでも来ないからでしょう？」

先ほどまでの怒気をはらんだ雰囲気を消し去って、青年は自らがキヤルと名を呼んだ少女を振り返る。

「何よ！？あたしだって色々見て歩きたいもの。セインのケチ！」

「ケチってねえ…」

ガラスの扉を開けて、豪奢な金の髪を靡かせ、子供らしく頬を膨らませて室内に入り込む少女に、ケチと言われながら、青年の色素の薄い瞳は優しい色合いを映す。

そんな二人のやり取りを、にこにここと見守る紳士は、おもむろに手を二度叩いた。

「お呼びでしょうか？」

室内の扉を開けて、ピシリと姿勢正しく入室して来たのは、これまた見るからに紳士的な男性だった。

「こちらの小さなレディに、紅茶とお茶菓子を用意してくれるかね？」

「かしこまりました」

礼儀正しく頭を下げ、ピシリと退室しようとする彼を、セインが呼びとめる。

「あーアルフォード」

「何でしょうか？セイン様」

「僕も行っても良い？」

席を立って、セインはアルフォードの傍へと駆け寄った。

「セイン様。それは、ご自分でお茶のご用意をされたい、という事でございますでしょうか？」

「うん！あ、コック長や君の邪魔になるのなら、無理にとは言わないのだけど」

セインの言葉尻が段々小さくなって行く。そこで、アルフォードは眉をしかめた。

今、自信が無さそうに目の前に立つこの人物は、自分の主の客である。客を厨房に立たせるなどもつてのほかで。

「失礼ながら、これは執事の私の仕事でございますので……」

「あー、うん。そうだよな？ごめん」

冷静に返されて、眉尻と一緒に肩をおとすセインに、アルフォードも眉尻を下げる。

「ふふふ、流石のアルも、セイン様には甘い様だね」

笑いだす主に、アルフォードが困ったように視線を向けた。

「ラオセナル様。笑い事ではありません」

「はは、すまなかつたね。お前の困った顔なんて、ずいぶんと久しぶりに見せてもらったよ」

「あーご、ごめん！」

主の言葉に、自分が困っていると気が付いて慌てて頭を下げるセ

インに、アルフォードはさらに困り果てた。

何せこの、遠路なく頭を下げるセインなる人物。

自分の仕えるラオセナル・オズワルド伯爵の、遠い先祖に当たるオズワルド家初代当主、ローランド・オズワルド卿の所持していた剣であり、伝説のセインロズドだというのだから、簡単に頭を下げられて困るのは当然だった。

セインロズドは五百年の間、このオズワルド邸の庭にある岩の上に封印されていた。その要因を作ったのがローランド・オズワルドの子供たちであり、現オズワルド家当主ラオセナル卿の先祖たちだった。

オズワルド家は代々、自分たちが犯した過ちを悔いながら、セインロズドを守って来た家系である。

その、当のセインロズドの封印が解かれたのは最近で、誰にも解けなかった封印を解いたのが、金の髪に青い大きな瞳の、目の前の少女である。

そんな二人を、伯爵が事の他大切にしているのは、当然と言えば当然のことだった。

アルフォードは仕方ないと諦めて、ひとつ、咳払いをする。

「分かりました。少しの間でよろしければ、ご見学されますか？」

そのアルフォードの一言に、嬉しそうに笑う自分より背の高い、眼鏡の長身の青年は、これで何百年も存在し続けているというのだから、呆れるというか、感心する。

そして何より、その砕けた人柄に結局、主人の言う通り、この人物には特別甘くなってしまうのを、自覚せざるを得なかった。

「ありがとう！」

満面の笑みで返されれば、悪い気はしないものだ。

この素直な笑顔が、セインロズドという伝説の聖剣である事など通り越して、セインという青年の魅力なのだと思う。

「では、こちらでございます」

自分が案外、このセインなる不思議な存在に、親しみを感じてい

る事に苦笑しつつ、ドアを開けた。

「うん！」

案内しようとして出ていくアルフォードの背を追いかけようとして、セインがくるりと振り向いた。

「キヤル！良い子にして待っているんだよ?!」

ぱたんと扉が閉じた後、くすくすと笑う老紳士と、半分頬を膨らませ気味な少女の二人が眼を合わせた。

「どっちが良い子にしてなきやいけないんだか、分からないわよね」
毒づく少女に、ラオセナルは微笑む。

「そう言うものじゃないよ。セイン様は君をととても大切にしている
ようだからね」

「あら。でもね？時々、セインなんか引っこ抜くんじゃなかった！
！って、思うのよ？」

大げさに身振り手振りを加えるキヤルの、呆れの色を含んだ物言いに、ラオセナルは笑みを深める。

「ほう？それはどんな時だね」

部屋に用意されていた水の張られたボウルで手を洗い、ラオセナルの隣の椅子によじ登って座ったものの、テーブルの上のお菓子にまで手が届かず、悪戦苦闘するキヤルの手前まで、菓子皿を寄せてやりながら、興味深々と目を輝かせた。

「えーっと、そうね。断りもなく人を抱き上げて二階の窓から飛び降りてみた時とか、予想で動いちゃって、その予想が的中していなかったら二人とも多分この世からサヨナラしていたんだろうなって時とか、勝手に突っ走って大怪我された時とか」

これだけ聞くと、いったい何をしているのか分からない内容に、それでもラオセナルはうんうんと楽しそうに頷いて聞いている。

「なるほど？君も、セイン様が好きなんだね」

唐突な物言いに、キヤルは大きな眼を、さらに丸く大きく見開いた。

「は？」

「おや。好きじゃないのかい？私は、セイン様の事は好きだがねえ」
大袈裟に首をかしげるラオセナル卿に、キヤルはぱつと頬を染めた。

「ああ、そういうことなら、まあ、好き、とも言えなくも、無いわね、うん」

眼が泳ぐ幼い少女の、もごもごとした喋り方に、ラオセナルはくすくすと笑う。

「今回は、長くいられるのかい？」

「それは、分からないわ。セイン次第：、っていうより、王様次第だわね」

「でも、海賊たちはもう、海へ帰ったのだろう？」

「それがそうでもないらしいのよね」。何せほら、ギャンギャンとあの王様だもの」

「ああ、まあねえ。それは否定できないねえ」

二人は同時に、腕を組んで眉をしかめた。

キヤルとセインは旅の途中だったのだが、国王から戻って来いと要請を受けた。普段の二人なら、そんな命令は国王だろうが無視してしまうのだが、知り合いの海賊船の、仲の良いコック長が「仲間を助けてやってくれ」というので、仕方なく首都であり王都であるこの町に、戻ってきているのである。

泣く子も黙る海賊王ギャンガルド。

彼の船を捕まえて、国王が脅したと言っただから立派なもので。

「もう、セイン様からお話を聞いた時には、倒れるかと思ったよ。そんな風に育てた覚えはないんだがね。教育係としては、情けなくて仕方がない」

「おじいちゃんが国王の教育係だったっていうのは聞いているわ。

でも、王様がギャンガルド並みに好奇心旺盛で、なんでかあのギャンガルドと仲が良くなっちゃったっていうのは、別におじいちゃん

のせいじゃないもの」

確かに、自分の船をたまたま襲った海賊が、キヤルとセインの顔見知りだと知るや否や、「セインを王城に呼び戻さなければ、海賊王の乗組員全員と、海賊船そのものを国王の所有物とし、命の保証はしない」、などという交換条件を出した国王の思いつきと、それを面白がって承諾してしまう海賊王のノリの良さに、この老紳士は関わってはいない。

しかもこの海賊と国王。馬が合うなどと意気投合して結託し、実は大変仲がよろしいのである。

キヤルはセインの分にと、小皿に分けられていたフェナンシエを頬張った。

「おいしい！」

「はは。それは良かった。今、セイン様とアルフォードが、追加を持ってくると思うよ」

喜ぶキヤルに、ラオセナルも頬を緩める。

「しかし、申し訳なくてね」

自分のあずかり知らぬところで海賊と国王が企んだ事柄に、この二人を巻き込んでしまった。知っていれば、止めることもできただろうに。

「あら。大丈夫よ」

「どうしてだね？」

「だって、セインだもの。何とかするわ」

きっぱりと断言する少女に、少し驚きつつも、笑ってしまう。

「セイン様を引き抜いたのが君で、良かったと思うよ」

しみじみと、小さく呟いたものだから聞こえなかったらしい。

「え？何？」

きよんとする少女の、少女らしい仕草に、また頬が緩む。

「そうだね。セイン様が君に封印を解かれて、一緒に旅に出た後も、こうしてこの館に立ち寄ってもらえるのが嬉しくてね」

「どうして？ここはセインのおうちじゃないの？」

「おや。セイン様がそう言ったのかい？」

「セインはそういう事は言わないわ。でも、ここのお屋敷はセインの前のパートナーの建てたおうちで、セインはこおうちの庭に封印されていたわけでしょ？」

オズワルド家の庭の一角にある岩に、突き刺さったまま朽ち果てて、ボロボロになっていたセインロズドは、一見腐った鉄の棒にしか見えなかった。しかし、不思議な事に、どんな力自慢が引き抜こうとしても、崩れる事もなく、もちろん抜ける事もなく、ただ岩に突き刺さっていた。

その、誰も引き抜く事が敵わなかった聖剣を、ちよつとしたきつかけでキヤルが簡単に引き抜いてしまい、セインロズドの中に眠るセインを目覚めさせた。

その際に、ラオセナルと知り合う事となり、こうして交流は今も続いている。

「セインだつて、王都に来て真つ先に、このお屋敷に来たわ」

「それは嬉しいね。ほんとうに、この家はある方の家なのだから、遠慮なく来ていただきたいね」

「言つとくわ。セインつたら、変に律儀だから、ここにも、帰つて来た、つていうより、懐かしい友達のおうちにお邪魔しに来た、つていう感じなんだもの」

ラオセナルが、頬杖を突く少女の頬をつん、と突つく。

「キヤル、私は君にも言っているのだがね」

「え？」

「セイン様の現所有者である君は、言ってみれば我が一族には家族も同然なのだよ」

「え？でも、それは違つと思うわ。わたしは、だつて」

おろおろする少女の頭を、老紳士は優しく撫でる。

「私も、孫が増えたみたいで嬉しくてね。だめかい？」

悲しそうに言われてしまつては、キヤルもどうしたらよいか分からず、しばらく口をパクパクさせていたが、やがで耳まで真つ赤に

なると、小さく頷いた。

「よかった。嬉しいよ」

ラオセナルは、またキヤルの頭を撫でた。

「失礼します」

ノックと共に、扉の向こうからこの家の執事の声が聞こえた。

和んでいられる時間はあとちょっと

「お茶とお菓子をお持ちしました」

トレイを持ったアルフォードが入室し、その後にはセインが続く。

「おや？どうしたね？」

テーブルの上にあったカップを、新しいものと交換し、マドレーヌの盛られた皿を並べ、紅茶を注ぐアルフォードの、わずかな表情の変化に気が付いたのは、この屋敷の主だけだった。

「あ、いえ。意外な事を先ほどお聞きしたものですから」

「意外な事？」

執事の、普段は見せない戸惑った様子をいぶかしがりながら、ラオセナルは新しい紅茶を口に含んだ。

「ほう」

思わず、関心の声を上げる。

「香りが良いね。味もふくよかだ。茶葉を変えたのかな？」

「いえ、そうではなく」

ちらりと、自分が座っていた椅子に座りなおして紅茶に口を付けるセインを見やるアルフォードに、ラオセナルの視線も動く。

「ん？」

二人の視線に気づいて、セインも顔を上げた。

「失礼かと思いましたが、セイン様から、紅茶の淹れ方の方法を教えてくださいました」

「そうかね。それは良かったじゃないか」

ラオセナルは驚きつつ、笑って執事を労うと、改めてセインに向き直って礼を述べる。

「ありがとうございます、セイン様。これでも我が家のお茶は美味しいと評判だったのですが、これでさらに、美味しいお茶を毎日頂く事が出来ますな」

うれしそうなラオセナルに、セインは照れ臭そうに髪を掻き上げ

た。

「昔は僕がローランドのお茶を淹れていたからね」

にこりと微笑みながら、さらりと言う。

その、オズワルド家初代当主がこの屋敷で暮らしていたのは、五百年も前の事だ。

「もちろん、アルフォードの淹れ方が間違っているわけじゃないよ？あれはあれで美味しい」

「そうね。セインのお茶は美味しいけど、アルフォードさんのお茶だって美味しいわ。私はいつだって ミルクティーだけど。淹れる人で味が変わるって面白いわね」

二人に褒められるすれども、フォローされるべきは紅茶の味ではなく。

「ほほ。では、私は尊いご先祖様が口にされた紅茶と同じ味を堪能しているという事になりますかな」

自分の主が、自分の考えていたことと同じ感想を述べた。

「当時よりも茶葉は良質なものになったし、ローランドがお気に入りだったメーカーは、もうないみたいだから、全く同じ、とまでは言えないかもしれないけど。淹れ方は昔のままだよ」

懐かしそうにセインが紅茶を見つめた。

五百年も昔の人物の嗜好を、当たり前のように話すのだから、彼は本当にあのセインロズドなのだと、改めて思い知る。

「貴重な体験をさせていただきました」

深々と頭を下げるアルフォードに、セインが慌て、ラオセナルが笑う。

「セインはお茶を入れるしか特技が無いんだから、そんなに感謝しなくっても良いのよ？」

そのほのぼのとしたやり取りに、しっかりと釘を刺すキャルの言い様に、涙目になるセインだった。

セインの持ち主であり今のパートナーでもあるキャルは、この眼鏡で長身の、のほほんとした聖剣に、少々手厳しいのが常だった。

「さて、じゃあ、そろそろ僕はお暇するよ」

和やかなティータイムを終え、セインが立ち上がる。

「おや。もう行ってしまわれるのですか？」

もう少し、ゆっくりして行ったらいかかと、老紳士は眉を下げ
る。

「うん。一応、僕らの到着は国王に知らせたし、ギャンガルドとジ
ヤムリムは城にそのまま向かったけど、やっぱりちゃんと、クイー
ン・フウエイルのみんなが解放されたか確かめておかないとね」

旅を中断してまで、この王都に戻って来た本来の理由は、知り合
いの海賊船クイーン・フウエイル号を、乗組員ごとまるっと人質に
とられたからなので、一応確認はするだけしておかないと後味が悪
い。

たとえば、当の海賊のキャプテンと、自分呼び寄せた国王が、意
気投合して単にセインをからかっているだけだとしてもだ。

「真意がどこにあるのか、あのガンダルフは油断できないとこなん
か、本当にギャンガルドそっくりだよ」

「昔から、退屈なのが嫌いでしたからね。キヤルとセイン様には、
申し訳ない事をしました」

「君が謝る事じゃないよ。だいたいの原因は、ギャンガルドなんだ
から」

ちなみに、ガンダルフとは、この国の最高権力者の名前で、いわ
ゆる国王の名だ。

それをこつとも簡単に口に出れるのは、セインがセインであるから
だろう。

彼の権力者嫌いなどところも多少起因するが、何百年の時を重ねて
存在する彼にとって、国王だろうが国家元首だろうが、若造に等し
い。

そして、ラオセナルは、というと、一応自身の君主という事にな
るのだが、現国王の教育係であった彼からしてみれば、自分の息子
か弟のようなものだった。

「キヤルはどうする？ここにいろ？」

セインの問いかけに、マドレーヌを口にいつぱい詰め込んでいたキヤルが、慌ててそれを紅茶で飲み下す。

「ああ、せつかくの紅茶とマドレーヌなんだから、味わって食べなよ」

「だって口に入れたばかりなのに、セインが話題を振るからでしょ？！あたしもお城に行くわ！」

勢いよく椅子から飛び降りた。ふわふわの金の髪が揺れる。

「ほほ、そんなに急がなくても、城は逃げやせんよ」

転がりそうなキヤルに、ラオセナルが微笑んだ。

「アル、お菓子を包んでもらえるかね？」

「はい、すぐに」

ある字の頼みに小さく頷くと、オズワルド家の優秀な執事は、小さな包み紙を取り出して、一つ一つ丁寧にマドレーヌを包むと、蠟紙の大きめな袋に詰め込んだ。

「どうぞ」

「わあ！ありがとう！」

にこやかに渡されたマドレーヌの詰まった紙袋を受け取って、キヤルもアルフォードに笑顔で礼を返す。

「そつえば、あの岩の聖堂はどうなったの？」

聖堂というのは、セインロズドが封印されていた岩を、取り囲むように作られた六角形の建物で、作ったのはこの町の役所だ。

オズワルド家が、「聖剣は実在する」と宣言し、証拠とばかりに自宅の庭を一部開放して、セインロズドの封印されていた岩を一般に公開してしまった事がある。そのときに、金儲けになると目論んだ役所が、観光用に聖堂を建てたのだった。

オズワルド家に見れば、お家の威信をかけた行為であったし、家の中にずっと有るよりは、人目に触れさせて、もしかしたら、セインロズドを目覚めさせる人物が現れるかもしれない、という微かな望みがあった。

五百年も封印されていたものが、ちよつと公開されたからといってすぐに封印がとかれるかと言ったら、そんな可能性は一パーセントにも満たなかった。

事実、聖剣の封印されていた岩を一般に解放したところ、様々な人々が列をなし、セインロズドを引き抜こうとやつきになった。終いには、見物料という名目で役所がチケット代を請求し、町中にセインロズド目当てに集まった観光客目当ての出店が立ち並ぶほどの人々が集まったが、どんな力自慢も、どんな権力者も、老若男女構わず聖剣・大賢者セインロズドを引き抜く事は出来なかったのだ。

しかし、奇しくもキヤルが現れ、ある日唐突に彼女によってセインロズドは見事に引き抜かれた。

偶然というには、起こるべくして起きた奇跡としか言いようがなかった。

「あの悪趣味な建物は壊したよ。もう一般に公開する必要もないから、あの岩の庭も、返してもらって壁も作ったからね。見たいと言う人がいれば、今でも見学は出来るようにしているよ」

ラオセナルの説明に、キヤルは満足そうに頷いた。

「そうね。それがいいわ」

セインロズド目当てに、さまざまな人がこの町を訪れ、確かに観光という面では成功したかもしれないが、同時に治安の悪化を招いた。

何せ、「セインロズドを手にした者は世界を手にする」と謳われた聖剣だ。

ただ見に来るだけなら良いが、野望を抱いたゴロツキが集まったようなものだった。

そもそも、王都というだけで、観光地には事欠かない町なのだから、余計な金儲けを目論んだ結果といえる。

「じゃあ、おやつも貰った事だし、行こうか」

セインがキヤルを促した頃、どたどたとけたたましい足音が、小さな部屋に響いた。

一応、気は使っているらしく、部屋の傍まで来ると、急ブレーキをかけて、足音が多少小さくなるものの、それでも急いでいる事が分かる早足で、扉も音は小さめだったが、せわしげにノックされた。何事かと全員で顔を見合わせる。

「入りなさい」

ラオセナルが入室を許可すると、頭を下げながら使用人が蒼白な面持ちで顔を出し、

「大変でございます。陛下がご到着なさいました。いかがいたしましたでしょうか？」

とんでもない事を告げた。

「……………」

全員でぼかんと口を開けてしまったが、呆けている場合でもない。「陛下つて、国王陛下？」

当たり前のことを、思わず口にしてしまったキヤルだったが、気にしない様子で使用人は頷いた。

「パレードを開催されたらしいのですが、到着点がこの家なのだそうです、門前でお待ちでいらっしやいます。ラオセナル様、何か聞いておいでではございませんか？」

そういえば、町に入った時、国王のパレードがあるような話を耳にした覚えがあると、セインは思わず遠くを眺めた。

「馬鹿は放っておきなさい。いずれ帰るでしょう」

深々と、ラオセナルが長い溜め息を吐いた。

「え、いえ、でも…その…」

蒼白だった使用人の顔色が、さらに土気色になる。

国王相手に無視をするなど、常識では有り得ない。

「良いんだよ。お前たちはいつも通りの仕事をしていておくれ。あの王様はただ遊びたいだけなんだから」

「はあ。かしこまりました」

ラオセナルの言葉に、なんとなく納得したのか。ぺこりと頭を下げると、「失礼いたしました」といって扉を閉め、今度は落ち着い

た足取りで自分の持ち場へ帰って行ったらしい。ぱたぱたと、小さな足音が遠ざかる。

「良いの？」

「良いのです」

キヤルの問いにも、ラオセナルはきつぱりと言い切った。

「それより、セイン様はどうされます？ ガンダルフ様にお会いするために城へ行くのではありませんでしたかな？」

「今現在、本人が屋敷の目の前に来ているのだから、手間が省けたといえ、そうなる。」

「んー、いいよ。僕は僕で、ちゃんと海賊船の皆の顔を見ておきたいしね。キヤルと一緒に、城へ行く。ガンダルフが居ようが居まいが、関係ないし」

セインが、キヤルの手を繋ごうと手を伸ばした時だった。

「なんだと！ 予がこうして迎えに来ているというのに！」

ばん！ という大きな音とともに、派手な格好をした派手なおっさんが、庭に面したテラスのガラス戸を突き破らんばかりの勢いで顔を出した。

彼の背後には、これまた派手な集団が跪いて控えている。

整然と並んだそれは、金糸の刺繍の、深く赤い軍服を身にまとい、帯刀したまま頭を垂れ。

掲げる旗には盾と剣に冠を頂いた獅子。地色は臙脂。金色の麦が盾を囲うその意匠は王国の最高位を示す。

すなわちそれは国王旗。

「予が迎えに来てやったぞ」

満面の笑顔で、白い正装に身を包んだこの男こそ。

「国王が何をしているの?!」

この国の第六七代国王ガンダルフ二世だった。

困ったお迎えご苦労様です

「ぬ。冷たいのう。大賢者殿が到着したというから、この祭りも開催したというのに」

「国費を無駄に消費しないで下さい」

唇を尖らせる国王を、オズワルド卿が咎める。

しかしガンダルフ王も慣れたものらしい。

「良いではないか。町の者、皆喜んでおる。経済が活性化したと思えば良いのだ」

特に反省するでもなく室内を見渡した。

「・・・お？」

こそそと、アルフォードの背後に隠れようとしていたキヤルとセインを見つけると、王は恩師であるラオセナルが何か言おうとしているのも無視して大声を上げた。

「おお！セインロズドよ！！！！」

それにびくりと肩を震わせたセインは、キヤルを小脇に抱えて、扉の前に控えるアルフォードに、小さく頭を下げると、脱兎のごとく逃げ出した。

「あ！こら！なぜ逃げる！？」

追いかけてよとしたガンダルフの襟首を引っ掴んで止めたのはラオセナルである。

「こ、これ！ラオ！何をする！」

「ガンダルフ様。ここは我が家です。ご承知か？」

猫の首を取ったような仕草で、国王の視線を自分に向けさせ、ラオセナルが凄む。

「し、承知しておるっ」

「ほう。それは大変よろしい。承知していらっしやっとは思えぬ行為の数々ですがな。では、あの方が、我が家にとってどんなに大事な方かも、ご存知ですね？」

目の前に、師の厳しい眼差しがあれば、さしものガンダルフ王も、首をすくめざるを得ないらしい。

「だから予がこうして自ら迎えに来たのではないか」

「パレードしてですか」

半目で睨むラオセナルに、小さくなっていた国王は、ここぞとばかりにニヤリと笑んだ。

「その方が面白からう？」

ガンダルフの、全く持って反省のない様子に、ラオセナルは深くと嘆息した。

「あの方の正体を、国民に発表する気ですか。いちいちお迎えに来られなくとも、登城する予定でしたし、それがあの海賊たちとの約束でしょう。この町に訪れられた以上、あの方は海賊を見殺しにはしないと分かっておられましょう？」

呆れながら、国王にこれほどまで強く進言出来る立場の人間というのは、この国において、元家庭教師である自分と、国王の父であり、今は隠居生活を楽しんでいる前国王だけだという事に、軽く頭痛を覚えるラオセナルである。

「ふふ。到着したと聞いた時は胸が躍ったのだがな。報告とギャンガルドだけが来て、肝心のセイノロズドが来んのだ。待ちきれなくてな」

楽しそうに、そんな事をうそぶく。

「祭りを、わざわざセイノ様のお帰りに合わせるように計画されて、いちいち派手なお迎えなんぞよこして、いったい何を考えておられるのです」

「楽しければそれでいいのだ。何にも考えてなどおらん
本気で言っているらしい。」

ガンダルフも、もう初老といっても良い年頃で、その答えは如何なものか。

そんな破天荒なガンダルフ二世ではあるが、政はまともに取り仕切っている。つい最近も、中央の内部改革を行ったばかりだ。

近々、各地方自治体の役場などの汚職についても審査する予定でいる。報告次第では、これまた地方改革も進めねばならなかった。他国への牽制も忘れない。

何を考えているのか相手に悟らせない彼の豪胆ぶりは、各国への警告にもなっている。また、実際に手を出して、痛い目を見た国は多い。

だが、普段は「楽しけりや何でも良い」をモットーに、恩師であるラオセナルと老中たちを困らせているのが、この男だった。

「さすが、あの海賊王と仲良くなれるだけの事はありますな」

「ふん。やる事はきちんとやっておる。予は律儀なのだ」

胸を張る出来の良いのか悪いのか分からない教え子に、ラオセナルは深々と何度目かの溜め息をついた。

「何を時化した顔をしておる。セインロズドは予にも大事な客ぞ。独り占めしようとするのは許さん」

「大事なお客様だと言うなら、もう少しセイン様のお立場というものを慮って下され」

分かっついて近衛騎士を引き連れ、パレードまでしてオズワルド家へ乗りつけたのは、セインやラオセナルが困る顔を見たいが為であると思えない。

「ちよつとしたサプライズじゃ」

「どこがちよつとですか」

兎に角、屋敷から追い出して、城に戻ってもらおうと、最高の国家権力を持つ不法侵入者を邸宅の外へと連れ出したラオセナルだったが。

「ガダ陛下」

あまりの事に、愛称と敬称がくつついた。

得意げに胸を張る国王の頭に、何十年振りかのげんこつを落とすて、ラオセナルは頭を抱えなくなった。

「おじいちゃん！こいつら何とかして！」

セインの背後に隠れているらしいキヤルが、顔だけこちらに向け

て涙目で叫ぶのを聞いて、二人が木の影に隠れて敷地の外を窺っているのに気付く。

屋敷の広い庭を抜け、残りのパレード部隊が待ち受けているだろう正門から追い出そうと、ガンダルフとその騎士たちを連れて来たは良いものの、自宅の正門前には、国王やパレードを、一目見ようと詰めかけた市民と、今後ろに控える近衛騎士の馬のほか、ずらりと整列した騎馬隊に歩兵隊に、まあ、要するに国王直属の指揮下にある近衛軍が勢ぞろいして、屋敷を市民と一緒に取り囲む形となっていた。

「…確認してからセイン様を逃がせばよかった」

ぼつりと呟けば、側に駆け寄って来たアルフォードが、深々と頭を下げる。

「申し訳ございません、裏口も使用人口も、出入り口は全て囲まれておりました」

「ああ。良いよ。お前の責任じゃないからね」

自分の執事を労う。

「我が家を奇襲でもして陥落させるおつもりでしたか？」

こうなると、怒りを通り越して呆れるばかりだ。

パレードといっても、こんな大掛かりな規模であるとは予想していなかった。良く見れば、天幕の引かれた馬車まである。

「それでも予は考えておる。名目上はお前を迎えに行つて城へ連れて来るだけのパレードじゃ。セインロズドの持ち主は、一応オズワルドという事になっておるからの」

この祭りそのものがセインロズド復活祭なのである。その聖剣を、長年にわたり代々引き継ぎ、見守ってきた名門オズワルド家に、国王が敬意を払って自ら赴き、その功績をたたえて城まで案内する、という趣旨であるらしい。

「なら、我が家の都合も考えていただきたいものですがね」

「ふふん。そうしたらつまらんだらうが」

パレードの名目で屋敷を取り囲み、逃げ場を無くしておきながら、

何を言うか。

確信犯である事は百も承知なラオセナルである。

このために正装させられ、わざわざこの屋敷まで連れて来られた近衛部隊には、気の毒としか言いようがない。

おまけに、自分の屋敷の家人たちも、いまごろ肝を冷やしている事を考えると、これも気の毒としか言いようがなかった。

そしてキヤルとセインである。

「セイン様、キヤル。申し訳ない。こんな王に育てた覚えはないのですが」

二人の傍へ歩み寄ると、セインは諦めたように隠れていた木の幹に寄り掛かって座り、その膝の上にキヤルが座って、手近に咲く小さな花をくすぐって遊んでいた。

「あー、しょうがないよ。ガンダルフだもの」

「そうよ。おじいちゃんが謝ることなんてないわ。これ、王様の仕業って事なのね？まったく、能天気な王様を持つと、臣下が苦労するわね」

本人を前に、萎縮も恐縮もしないのがキヤルとセインである。

「逃げ場はないみたいだね？」

セインがラオセナルの傍に控えていたアルフォードに確認する。

「申し訳ありませんが、完全に包囲されております」

アルフォードは申し訳なさそうにうなだれている。

「だから、お前が気に病む事は無いのだよ。そう肩を落とすな」

「はい、申し訳ございません」

良いというのに謝罪の言葉を重ねるアルフォードの肩を、オズワルドは軽くたたいて励ました。

「そうよ。執事さんが何かを気に病む事は無いわ。この騒動の発端はその髭オヤジでしょ？」

キヤルがガンダルフを指差した。

「む？予の事か？」

「他に誰がいるのよ。その反応、誰かさんを思い出してムカつくわ。」

あんたたち実は兄弟なんじゃないの？」

誰の事を言っているのかは言わずもがな。

「えー？国王の実は弟です、って、それ面白がりそうだよ。ギャンギャン」

王弟が海賊の王だなどと、これはこれで一大叙事詩が書けそうな話だ。

セインがもの凄く嫌そうな顔をした。

「本当に兄弟だったりするんじゃないでしょうか？」

ラオセナルまで疑い始めた。

「それはそれで面白そうじゃな！」

ガンダルフが顎をつまんで笑う。

「義兄弟の契とやらを結んでみるのも良いかも知れんいう」

余計な事を言ってしまったと眉根を寄せるキヤルとラオセナルを余所に、良い事を思いついたと嬉しそうだ。

そのガンダルフの正面に向き直ったラオセナルは、にっこりと微笑んで、現在の状況の先を促した。

「…で？」

「うむ。乗れ」

満面の笑顔で返された。

本当に義兄弟の契りなど結ばれれば国家的にも国際的にも困るのだが、この話は今は置いておくことにして。

パレードの名目がオズワルド家当主を迎えに行く事になっているのだから、ラオセナルもセインとキヤルごと、馬車に乗せられなければならないらしい。

しかし、国王の思惑通りに事が運ぶのも、ここまでやられて大人しく従うのも癪だ。

「坊ちゃん」

ラオセナルが、真顔で呟いた。

「な、何だ」

ガンダルフが鼻白む。

初老に入ったような年齢でも、昔ながらの呼び方をされれば、返事をしてしまつらしい。

「もう、おいくつになられましたか？」

「む。なんだ急に」

「いえ。王子も王女も、皆様大きく立派におなりになりましたし。まあ、末のお子様は、まだ赤子も同然でいらつしやいますが、これまた可愛らしゆうて。奥様方は齊しく仲がよろしいですし、我が国はあと少しで安泰かと思ひましてな。…坊ちゃん？」

「う、うむ。あと少しとは？」

「坊ちゃんもお人が悪い。そんな愚凡にお育てした覚えはございません」

にっこりと微笑まれば、ぐうの音も出ないガンダルフ二世は、拗ねたように唇を尖らせた。

「安心しろ。予のこの育ちはもう、天賦の才だ。誰もラオの責任は問わぬ」

「ふむ。さようでございますか。なら、私も安心してあの世へ行く準備が出来ますな」

言っている内容とにこやかな表情の割に、ラオセナルの声は堅い。すなわち、

「国民の運命を左右する一国の主が、己の子供たちまで大きく成長するほどイイ歳をして、いつまで遊んでいるつもりだ馬鹿者が。育て上げた恩も忘れるようならそれなりに覚悟しておけ。いつまでも坊ちゃんではいられると思うな」

という事である。

ちなみに、「あと少しで国が安泰」とは、王がもつとしっかりしたら、という意味合いだ。

「む。少しは信用するが良い」

「少しで宜しいので？」

破天荒な国王も、師には敵わないらしい。

一瞬洪面を作ったが、すぐににやりと笑って返す。

「安心しろ。いつか全面的に信用させてやる」

「それまでは野放しにしろと?」

「出来ればその方が予は嬉しいぞ」

「ほう。まあ、良いでしょう」

無駄と諦めたのか、ただ聞き流す事に決めたのか。おそらく後者であるのだろう。

一旦会話を打ち切ると、ラオセナルはキヤルとセインを呼び寄せ、パレード用に色とりどりの花で飾られた馬車を邸宅の庭まで移動させると、二人を乗せ、自分も後に続いた。

もし、二人が馬車から見えたとしても、オズワルド家の血縁者が何かだと思ってもらえればそれで良いという配慮もあった。国民にとって、何でもない二人が国王の馬車に乗っているのは不自然極まりない。

天幕付きの王家来賓用の馬車は広くゆったりとした内装で、向かい合わせに座っても間にテーブルを挟んでお茶でも楽しめるようになってる。

ラオセナルはアルフォードに自分も城へ行く事を伝え、薄手のカーテンを引き、あとはゆったりと備え付けの長椅子に腰かけた。

「あまり、外はご覧にならないほうがよろしいでしょう」

「そうだね。ありがとう」

セインは万が一を慮って、あまり外からは見えない位置に腰を下ろす。

逆に、キヤルは興味深々で、馬車の内部を観察し終われば、あとは外を眺めて道行く人々に手を振った。

パレードは進み、オズワルドの屋敷の外周を一周してから大通りへと移動を開始する。

大人しく屋敷を解放してくれたようだ。

こうなるともう、馬車が走るに任せるしかないので、ラオセナル

もセインも、ある程度ガンダルフ二世に振りまわされる覚悟を決めて、セインにいたっては、いまだに城に居座っているであろうギヤンガルドも含む破天荒な自己主張の激しい二人に挟まれるのかという杞憂も持ちつつ、開き直る事にしたのだった。

「きゃあ！外は凄く綺麗よ！お花が降って来るわ！」

肝が据わっているのか、ただ女の子で華やかなものが好きだからか。

キヤルだけが、思い切り元気である。

お城の中に入ってみれば

パレードは順調に進み、程無くして城へと到着した。

と言っても、城の敷地が広いので、門をくぐって、また門をくぐり、三度目の門で漸く停まった。

楽隊の演奏も止まり、代わって城内に控える門番のラツパが響く。なるほど、思いつきの割には公式的にこの祭りはきちんと運営されているらしい。

「陛下！お帰りなさい！」

薄桃色のドレスの裾をたくし上げ、嬉しそうに走って来るのは、柔らかな茶色の髪の少女だった。

「おお、姫よ。客人の前ぞ。そう走るものではない」

たしなめながら、それでもガンダルフの頬が緩んだ。

胸に飛び込む細い体を抱きしめて、頭を撫でてやれば、少女も嬉しそうに笑った。

「これはこれは、メアリティア様ではございませんか。お久しぶりでございます」

ラオセナルが一礼すると、少女はふわりとスカートを持ち上げ、軽やかに足を交差して腰を落とし、淑女の礼を取った。

「お久しぶりですわ。オズワルドのおじ様」

「これはこれは。大人びて来られましたな」

丁寧なお辞儀に、ラオセナルの頬も緩む。

「お父様のお客さまって、おじ様の事？」

愛らしく首をかしげる王女に、ラオセナルは苦笑して答える。

「まあ、一応私もお客の中には入らせていただいているようですが、正確にはあちらのおふた方です」

小さな子供と、その子供を馬車から降ろしてやっている長身の青年へと、ラオセナルが視線を向ければ、王女も二人を目にとめた。

子供はふわふわの綿菓子のような金の髪と、大きな青い瞳が印象

的な可愛らしい少女で、幼くまるやかな頬は赤く色づいて、その愛らしさに拍車をかけている。

対して、青年はほっそりとした体つきで背は高く、全体的に色素が薄い。武術をやっているようにには見えないから、学者か何かだろうか？

王女の視線に気づいたのか、二人がこちらを振り返った。

彼女の身分を知らないのだろう。挨拶代わりににつきりと微笑まれる。

そんな二人を、ラオセナルが手招いた。

「はじめまして。ようこそお出で下さいました。私、ガンダルフ二世が三女、メアリティア・フォン・フィオーレと申します」

先ほどラオセナルにしたように、ふわりと挨拶をする。

しかし、相手にとってそれはどうでもよかったようだ。

「あら。そんな固つ苦しい挨拶なんていらないわ。私はキャロット・ガルム。キャルでいいわ。よろしくね」

キャルと名乗った少女が手を差し出したので、思わず握ると、ぶんぶんと勢いよく振られてしまった。

「僕はセインと言います。よろしく」

腕ごと手を振られるその横で、長身の彼が名乗る。

眼鏡をかけた、優しそうな青年だったが、何処か不思議な雰囲気があった。

「ほら、キャルってばそのくらいにしないと、王女様の手がもげちゃうよ？」

「だって美人なんだもの！」

「…君は本当に美人さんが好きだねえ」

メアリティアをきちんと王女と認識してこの態度という事は、どうやらこの二人に身分などというものは関係が無いらしい。

ぽかんとしているメアリティアに、ラオセナルがくすくすと笑った。

「ラオ。笑うなんて人が悪いよ」

自分たちの事を笑われたと思ったセインが、照れたように頭を掻いた。

「いや、すみません。王女が驚いておられるのでね」

その言葉で、メアリティアがハツとして、顔を真っ赤に染めた。

「わ、私つたら！」

慌てる王女の頭を、ラオセナルが撫でて落ち着かせる。

「メアリ様においては、初めてのご経験でしょうから、お気になさいますな」

「なに？何が初めてなの？」

興味深々にキヤルが顔を出すものだから、咄嗟にメアリティアは口を両手で押さえた。

また先ほどみたいに、ばかりと口を開けてしまつては、父王のお客様に対して余りに無礼というものだ。

「先ほど、キヤルが殿下の手を握つて挨拶したでしょう？そういう挨拶が初めてなんですよ」

慌てているうちに、自分が口を開くより先に、ラオセナルが説明してしまつた。

仕方ないのでこくこくと頷いてみる。

「ふうん。お嬢様育ちなのね」

小首をかしげるキヤルの頭に、セインがたしなめるようにポンと手を置いた。

「真正正銘のお嬢様だからね。王女様だもの。庶民風の挨拶なんて、した事がないんだよ。それに、さっきのキヤルの挨拶の仕方は、ちよつと大げさだったし」

あれが城の外に暮らす庶民の挨拶なのかと思つたが、少し違つらしい。

「それにしても、こんな美人が、あの王様の娘さんだなんて信じられないわ！」

また、キヤルに手を取られてぶんぶんと振られた。

「あ、あの。お父様が何か？」

「きゃあ！お父様だつて！」

大きな瞳をキラキラと輝かせ、キヤルは嬉しそうだ。

「あの王様には勿体無いくらいだわ！」

いったい何が勿体無いのか聞いてみたい気がしたが、キヤルの勢いに負けて、結局王女は口をぽかんと開けたままになってしまった。

「ほらほら、王女様が困つてるでしょう？」

セインがキヤルを王女から引き剥がす。

「すみません、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですわ。私こそ、驚いてしまつて申し訳ありません」

気遣うセインに、にこりと微笑むと、彼はぺこりと頭を下げた。

「メアリ様。そろそろお勉強のお時間ではありませんか？」

ラオセナルの言葉に、王女はハツとして顔を青ざめさせる。

コロコロと変わる表情に、老紳士も苦笑して、ちらりと背後の二階の窓に視線を送ると、そこには窓から腕を組み、いらいらとこちらを睨む教師の姿があつた。

「きゃー！」

教師の存在に気付くと、小さな悲鳴を上げて、メアリティア王女は慌ててぺこりと頭を下げる。

「私、これにて失礼させていただきますわ。どうぞ、ごゆっくりとご滞在下さいませ」

どんなに慌てていても、淑女の礼儀は忘れない。

初めの挨拶と同じに、ふわりと礼を取ると、彼女はそれでも走らずに、しずしずと去って行った。

「あの子本当にガンダルフの娘？」

感心したような嘆息をして、キヤルが言う。

「真正正銘、メアリティアは予と第一王妃との間の娘だぞ」

いつから聞いていたのか、国王が間に割つて入り、キヤルの頭をぐりぐりと撫でまわした。

「ちよつと！やめてよー！」

王の手の下から逃れると、キヤルはセインの背後に逃げ込み、ベ

！と舌を出して威嚇する。

「他の子供たちも、晩餐会の時にでも紹介してやろう」
そう言うガンダルフ王に、キヤルは頬を膨らませた。

「いらぬわよ。私とセインはタカに会えたら帰るわ」

「そこでギャンガルドではないのか」

「ギャンギャンになんか会ってどうするのよ。クイーン・フウエイ
ルのみんなに会えたらそれでいいわ。それが目的なんだし」

「それは困る。予の用事が済んでおらん」

「知ったこつちやないわね」

セインの背後から顔半分だけ出したまま、あかんべーをする。

「そもそも、僕らはせっかく旅した道をこうして戻ってきたわけだ
し、その分の代償は高くつくってということ、わかっているのだから
ね？」

キヤルに次いで、セインがにこりと微笑んだ。

「ふん？海賊から聞かなかったか？」

「なにを？」

片眉を上げるガンダルフが言わんとしている事を察知して、セインは不機嫌を隠さずに眼鏡の奥からガンダルフをねめつけた。

「…ほう？まあ、良い。ここで言うなというならそうしよう」

「是非、そうしてもらいたいね」

ガンダルフの言葉に応えながら、セインは自身の背後にいるキヤルを、王の視線から外すようにさらに背後へと隠す。

海賊が何を自分に伝えたか、忘れたわけではない。

その話そのものも、キヤルだつて聞いている。

だが、今ここで、その話を振り返り返してまで、もう一度キヤルには聞かれたくない話題だった。

「で？僕に用事つて、まさか本当に君の近衛隊を鍛え直して欲しいわけじゃないのでしょうか？」

「何を言っておる！もちろん、鍛えてもらえるならそれに越したことは無いぞ」

ガンダルフが嬉しそうに両手を広げるのを、彼の傍にいた近衛隊の、多分隊長だろう。袖の紋章が一際目立つ若者が、ぴくりと頬をひきつらせた。

「君の自慢の近衛隊は、よそ者の僕なんかに教えてもらいたくないかなさそうだけど？」

先ほどから痛いくらいに突き刺すような視線を近衛隊から感じていたセインが指摘すると、ガンダルフは自分の側近であろう近衛の青年を振りかえった。

「い、いえ！そんな事はありません！自分は貴公に投げ飛ばされた事があります！お手並みは重々承知しておりますので！」

慌てて言い募る青年を、ガンダルフは指差して、今度はセインを振り返る。

「こう申しておるぞ」

「…どう見たって、君に逆らえないから言っているだけだろ？」

うるん気な目でガンダルフを見やると、近衛の青年はシャンと背を伸ばして叫ぶ。

「そんなことはっ！」

「あるでしょ？」

最後まで言わずに、セインが否定した。

以前、セインロズドの封印がとかれたばかりの頃。

ガンダルフが面白半分にセインをからかったために、セインが近衛隊と、この王都の役人を、構わずぶちのめした事がある。

それが元で、ガンダルフは役所の制度を見直し、様々な改革を民衆と共に言う事が出来たのだが、それはまた別の話だ。

近衛隊員たちは、国王の傍に仕え、国王の専属の軍隊であり、いわゆる国軍のエリートたちなのである。

それが、どこの誰とも分からない、得体の知れない、何処から見ただって武術だの剣術だのに縁のなさそうな、ひよろりと細い眼鏡男相手に叩きのめされたのだ。

トラウマは深い。

「正直に言いなよ。ガンダルフの事は、僕より君らの方が詳しいだろ？」

暗に国王の騒ぎ好きな性格を指摘され、青年はムツとして口を開いた。

「確かに、貴方の实力は、我々が束になっても敵わなかったのだから、相当なものでしょう。しかし、貴方は只の一般市民のほずです。それが、我らが国王に何という態度。あまつさえ呼び捨てにするなど言語道断！かように礼儀を欠いた御仁に、我等は頭を下げる術を知りません！」

精一杯の虚勢を張ったのだが、セインには効果が無かったようで、彼を指差してガンダルフを見やり、

「だ、そうだよ？」

などと、この国の主を前に、態度を改める気はさらさらないらしい。

「貴公！」

掴みかかろうとした青年を制止したのは、当のガンダルフ王だった。

「やめておけ。お前など百人束になった所で、彼には勝てぬ」

「剣術で負けていようと、そう言う問題では」

「やめておけと言うておる！」

血気逸る若者に、王は苦笑する。

「剣術どころか、誰が束になってもこの方には敵うまいよ」

一瞬、自分が仕える王の言葉が理解できず、仕方なく押し黙った。

「それは大袈裟に過ぎる。僕はそんな大それた存在じゃないよ」

言われた本人は、褒め称えられたにもかかわらず、ムツとしている。

なんとも不思議な会話だった。

しかし、少し考えるそぶりを見せたかと思うと、セインは近衛の青年に向き直り。

「…そうだね。君は国王だ。その君に仕える彼にしたなら、僕の言動

は主に対する無礼に値する。僕が悪かったよ」

ふいに頭を下げた。

その行動に、青年だけではなく、側にいた者全員が驚いた。

「セイン様が頭を下げるようなことではございません！そもそも、王が貴方を呼び寄せたのですから、これはきちんと説明をしていなかった王に責任がございます！」

ラオセナルがセインに頭を上げるように促す。

「でも、彼の自尊心を傷つけてしまったのは僕だ」

苦笑して、セインは顔を上げた。

「それに、僕は僕の素性を知っている人間を、これ以上増やすつもりはないよ」

それは、自分の正体を知るガンダルフへの釘刺しに他ならない。

「ふむ。なるほど？」

ガンダルフはにやりと笑う。

「予は、そなたに礼を取ってもらえるほどの人物ではない。よって、そのように頭を下げる必要は無いだろう？予はそなたと対等に会話したい」

その言葉には、近衛の青年が慌てた。

「陛下！」

「さがれ！」

王に一括されて押し黙る。しかしその瞳は、セインを睨んだ。

青年の様子に、ガンダルフは一つ嘆息すると、彼の頭を撫でてやった。

「予に対するお前の気持ちは嬉しい。だがしかし、相手を敬うかどうかは時と場合により、今は相手による。そのようなプライドなど捨ててしまえ」

「！」

「予を重んじ、礼節を重んじる。それも良かるう。だが、それを他人に押し付けてはならん。押し付けは、単なる欺瞞と傲慢の産物だ。違うか？」

そう言われてしまえば、青年は押し黙るしかなく。そんな青年に、王はじゃらりと硬貨の入った袋を手渡すと、にんまりと笑った。

「お前の忠義は良くわかった。近衛の連中は、もう休んで祭りを楽しんで良いぞ。これは褒美じゃ。皆で遊んで来い」

「これは、勿体無くございます！」

断ろうとする青年の手に、かまわず袋を押し付ける。

「良いのじゃ。そなたの気持ちに、予は感動したのじゃ。遠慮なく受け取るが良い。微々たるものだが、予の感謝の気持ちじゃ」

ガンダルフの言葉に頭を下げ、彼は思わぬ褒美に喜ぶ近衛隊を引き連れて去って行った。

「アメと鞭の使い分けが上手いのね」

キヤルがぼそりと呟いた。

「それでなくては、一国は治められぬからなあ」

そんな事を言いつつ、ガンダルフは満足気に近衛隊の後姿を見送っている。

しかしせっかくの良い気分を、上機嫌なセインの言葉が打ち破った。

「これで、僕が彼らの講師になる事はまず出来ないよね」

本気でうれしそうだ。

思わずガンダルフは眉尻を下げて肩をすくませる。

「あやつに、予に対する態度を改めるような事を言っておったではないか」

「それは、彼みたいに対象が側にいた場合。今は居ないでしょ」

「ラオが居るではないか」

王に指差され、ラオセナルはその指を弾き、にっこりとほほ笑む。

「私は別に、セイン様が陛下に何を仰いませうが、どんな態度をお取りになられませうが、気にいたしませんよ」

「ね？」

セインはセインで、当然とばかりに同意を求めた。

「むむう」

悔しがるガンダルフの頭を撫でて、セインが笑う。

「まあまあ。どうせ本気で近衛隊を鍛えてもらおうなんて思っていないからだったのでしょう？ 案外アレじゃないの？ 道中僕が狙われたりした事と関係があるんじゃない？」

爽やかに迫力のある笑顔だった。

王様の執務室（前書き）

行間を開けてみました。こちらの方が読みやすいかと思いますが、
どうでしょうか。

王様の執務室

「ふむ。やはり何かあったか」

立ち話も拙いという事で、国王の執務室に通された三人だったが、大きなソファーに、キヤルはそわそわと先ほどから落ち着かない。

大人が一人寝転んでも、余裕がある大きさだ。

装飾はなめらかな曲線を描く唐草を彫刻しており、張つてある布は細かな花模様のごブラン織りだ。

全体的に固い印象のあるこの執務室に置いて、このソファーだけ可愛いサーモンピンクを基調としているあたり浮いている。

「そう言うって事は、アレはやっぱりここ関係？」

落ち着かないキヤルをよそに、セインとガンダルフは会話を続ける。

「ふむ。まあ、ここというより、これから会わせる予定の客人関係か」

「客人？」

眉を顰めるセインの疑問に、ガンダルフは大きく頷いた。

「まあ、あまり話したくないようじゃから？」

ちらりと、キヤルを視線で示すガンダルフに、言わんとしている事を悟って、セインは嘆息する。

「分かった。そう言う事なら、あとで話を聞こう」
「話が早くて助かる」

ガンダルフはセインの反応に満足気に頷くと、にやりと笑った。

「何？」

「ふむ。そなた、足はもう大丈夫なのか？」

王都を目指す途中、爆発から起きた土砂崩れからキャルを庇って、両足を大怪我した事を言っているらしい。

「…おかげさまで」

その怪我を知っているという事は、国王には道中何があったか、全て悟られていると思って間違いないだろう。

「トイコスでの活躍は、予も聴いて知っておる」

「トイコス？」

「なんだ。知らずにいたのか。壁に囲まれた城塞都市に立ち寄った
だろ」

王の言葉に、黙って出された紅茶を口に含んでいたラオセナルが、
ふと呟いた。

「ああ。あの城主の息子が救いようのない町ですか」

思わずラオセナルを凝視したセインだった。

常に紳士的な態度を崩さない彼である。こんな攻撃的な一言を零

すのを聞いたのは、初めての事だ。

確かに、あの町の城主の息子は、自分の一生をかけてもう二度と会いたくない部類の人間だった。

「あの町、トイコスっていつの？」

そのまま、ラオセナルに訊ねたのだが、返事を返したのはガンダルフだった。

「本当に知らずにいたようだな」

「だって、興味なかったもの。早く町を出たくてさ。精神的に良くないよね。あの町」

今度は、セインの言葉にラオセナルが、うんうん、と頷いた。

誰が行っても、精神的にダメージを受ける町であるらしい。

「で。かどわかしに遭ったそうだな」

「!!!!!!」

これにはセインも驚いたが、ラオセナルも驚いた。

かろうじて紅茶を噴き出させずにすんだものの、思いっきり咽ている。

「ごほっ！けほっ！けほっ！」

「大丈夫？」

慌ててセインが背中をさする。

「だ、大丈夫です、セイン様。それより、かどわかされた？」

真っ直ぐに見詰められて、返答に窮した。しかし嘘をつくわけにもいかないので、

「あー、うん」

しぶしぶ頷いた。

「両足が使えなかったからこそだろうなあ。そなたを連れ去るなど、正体を知らぬとは言え、その者は剛の者と褒めてしかるべきだろうな」

豪快に笑うガンダルフを、セインが睨むが、涙目であるので威力は半減している。

「大変だったんだよ。これでもっ！」

宙吊りになってみるわ、鎖で繋がれるわ、久々に初対面で同じ空気を吸うのも嫌だと思わせてくれる人物と出会うわ。

何にしても、歩けないというだけで、物凄く苦労した一件だった。

「ああ、大変だったわね」

先ほどからソファアの可愛らしさに夢中だったキヤルが、セインが攫われた話は聞こえたようで。

「でも、何でそれを王様が知っているのかしら？」

子供らしい素朴な疑問に、ガンダルフの頬が緩む。

セインやラオセナルなどは、「一応、ちゃんと役場や市制の報告書には目を通してほしい」もしくは「この男の事だから、密偵くらい放っているだろう」という予想のもと、疑問にも思わない。

実際、その通りなのだが。

「予の情報網を甘く見てもらっては困るぞ。これでも一国の主だ」
にこにここと、キヤルの頭を撫でようと手を伸ばしたが、サツと避けられてしまった。差し伸べた手の行き場に困って、ガンダルフはもじもじと手の平を見つめた。

「あの町には、予も手を焼いていてな。助かったよ」

何度も中央庁から勧告を促し、忠告しても言う事を聞かず、罰金を科したところで金はあるのかびくともしない。

常に領主の思いつきや、わがままな思い込みで町の政が進み、とんでもない決まり事で領民を苦しめていた。しかし領主本人は良かれと思って法を敷いているので、自身が自身の民を苦しめているなどとは思えないから気付きもしない。

しかし、それらの傍迷惑な領律も、裏で思い込みの激しい領主を唆し、操っていた執事の仕業だった。

セインがその町で誘拐され、誘拐した本人が、中央からの昇進の誘惑に誘われた当の執事であった為、成り行きで執事を捕まえた。

今はまともな領土に戻すべく、復興への道を歩み始めている筈だ。

「それは別にいいけど。そう言えば私、王様に会ったら聞きたい事があったのよね」

ガンダルフが礼を言うという事は、あの執事を捕まえたいきさつも承知しているという事なのだが、キヤルはもう国王の情報量の多さについて、先ほどの説明で納得しているようで、既に気にしていないらしい。

「聞きたい事？」

聞き返すガンダルフに、大きく頷く。

「何故、あのギャンガルドなんかに使者を頼んだのかしら？」

「む。駄目か」

「…駄目だって知っていて頼んでいるでしょう。おかげで大変だったんだから！」

面白そうに頷くガンダルフに、キヤルが不機嫌さを隠そうともせず、国王を睨む。

その手はセインの上着をぎゅっと握っているの、幾分、王様というものを理解してはいるようだ。

「お、王様だからって、何したって良いってものじゃないと思うわ
！」

この場合、キヤルもセインも、とっくに不敬罪に問われかねないのだが、王城に到着した際の近衛とのやり取りから、それはないと

分かっている。それでも少々大人しかったのは、分かってはいても緊張していたかららしい。

なにしろ今まで見て来たどの貴族の家や城などと比べようもなく、王城は広く豪華で、清々しいくらいに高い天井にまで、絵画だったり建築上の組み合わせで模様が浮き出ていたり、見どころだらけだった。

今居る執務室も、通って来た廊下や部屋に比べれば質素なのだろうが、どこもかしこも値段が張りそうな素材ばかりである。

下手に触って、何かあつては大変。

床まで美しい輝石のタイルで埋め尽くされて、緊張しない方がおかしい。

おかげで、ガンダルフへの態度に、先ほどから勢いが足りない。

「ふうむ。しかし、もう旅に出て時間も経つておつたし、誰かを雇うにも体力があつて、きちんとした目的地もないそなたらに追い付ける人物となると、あの海賊王しかおらん」
「なるほど」

言われてみればそうなので、セインなどは思わず頷いて、キャルから抗議の視線を向けられる。

「まあ、ギャンガルドなら、連れて来た美女と一緒に港の宿泊所におる。奴の乗組員と一緒に、ずーっと騒ぎっぱなしだ」

どうも、クイーン・フウェイル号のみんなは無事にいるらしく、

ホツと息を吐いたキヤルの手を、セインがあやす様に叩いた。

「…ギャンガルドを雇った理由は分かったわ。でも、彼を脅すような真似をしたのは何故かしら？」

キヤルとセインを王城へ連れて来る条件として、ギャンガルドの船と乗組員を人質にしたと聞いている。

その行為も、一国の主としてふさわしくは無いだろうし、そもそもそんな事をされて、面白がるだけでギャンガルドが動くとも思えなかった。

「ああ、それは、あ奴から提案してきたのでな。予はそれに乗っただけだ」

「は？」

王の言葉に、思わず聞き返した。

キヤルのぽかんと口を開けた表情に、ガンダルフはしてやったりと笑う。

「ただ連れ戻しに行つて、金をもらっただけじゃつまらんから、どうせなら俺の船を賭けよう、とな。ギャンガルドが言つて来おつたもんだから、こちらはそれを断る理由もない。受け入れただけじゃ」

「……………」

流石ギャンガルドというべきか。いかにも彼らしいのだが、大馬鹿にもほどがある。

セインは眉間をもみ、キヤルは眉を吊り上げた。

「ギャンギャンだなあ」

「馬鹿だ馬鹿だと思ってたけど、例えようがないくらいの大馬鹿ね」

二人は同時に深く深く、諦めたように嘆息した。

企みの一歩前（前書き）

今回短いです。すみませんWW

企みの一歩前

ともかくこれで、ギャンガルドへの貸しが一つ出来たと思えば、
どうでもいいことだ。

返してもらうつもりもないが、あの男の事である。いくらでも貸
しは作っておいて損は無い。

「あ奴らに会いに行くつもりなら、今日は城に泊まるがいい」

にこにここと、ガンダルフが胡散臭い笑顔をまき散らすので、キャ
ルはじつと半眼で国王を睨んだ。

「何かあるでしょ？」

「ふむ？まあ、迷惑をかけたからな。侘びと思えば良い」

「侘び、ねえ？」

にこにここと笑顔を崩さないガンダルフを、キヤルもセインもジツ
と睨むが、この国王がそれくらいでびくともするわけはなく。

「僕に用事があるなら、あとで要件を聞くよ。それで良いだろう？」

セインが頭を掻きながら提案すると、ガンダルフは満足そうに頷
いた。

「そうしてもらえると、助かるね」

「…わかった」

ガンダルフとセインだけで話をまとめると、キヤルが眉を吊り上

げた。

「ちょっと！勝手に決めないですよ。わたしはこんなとこに長居するつもりはないのだけど?!」

すると、セインはくるりとキヤルに向き直る。

「ねえキヤル。お詫びに城へ泊れっていうんだから、ご馳走いっぱい食べられるよ?」

「ご、ご馳走?」

ぴくりとキヤルの鼻が動いた。

セインは大きく頷く。

「この際だからさ、食べたい物の何でも頼みなよ。それに、お礼っていうのだから、新しい洋服も新調してもらえばいいじゃない?」

「新しいお洋服…」

キヤルはぶつぶつと何か独り言をつぶやくと、ぼんと手を叩いた。

「分かった。泊まるわ!」

彼女の眼はきらきらと輝いていた。

「でも条件があるわ」

最高の笑顔で、びしりと指を一本突き立てる。

「ご馳走と新しいお洋服はもちろんだけど、クレイの鞍と、あと、

旅支度がしたいわね。保存食とお薬をいくらかと、通行証！」

ハンターパスは一般的な通行証の役目も担うので、キヤルには通行証などというモノは必要が無い。しかしここで国王に頼むという事は、一般的なモノにはないそれなりの特権付きの通行証を寄せという事か。

「ふむ。それはあれか。フリーパスの通行証という事かな？」

「それは素敵ね。そうしてくれるならありがたいけど、セインの通行証が欲しいのよね」

一般の通行証は、関所や国境を超える際に必要となる、出身地や身分などを保証したもので、遠方への移動の許可が下りている事を指し示す、旅行にはかせないものだ。

しかし、セインは元々が戸籍などというものを持たないため、通行証の発行は難しい。

そこで、ついでだから国王の権限で作ってしまえ、ということだ。

ついでに、交通費も無料になる特別な通行証であれば、それはそれで、持っていて悪いという事は無い。

「今までこの国の中しか旅行できなかったけれど、通行証が貰えたら行動範囲を広げられるもの」

それは、彼らの探し物を見つけるためには、必要不可欠な事である。

キヤルだけなら、だいたいの身分証明証の代わりにもなるハンタ

「パスを持っていけば、適当に国境越えは出来るが、セインはそういうわけにもいかない。」

「そんなものなくたって、必要な時だけセインロズドになればいいと思うんだけど？」

のほん、とセインが言えば、キヤルに手の甲を抓られた。

「抜き身の剣を持って歩けっというの？」

「痛い痛いごめんなさい！」

さらに力を込められて、悲鳴をあげそうになったが、それは手を取り返すことで持ちこたえる。

抓られて真っ赤になった甲を、セインはふうふうと息を吹きかけて冷やしにかかったが、かけた息が既にしみる。

「うっ。内出血してそう」

涙目で呟けば、二の腕も抓まれた。

今度は悲鳴が上がった。

「仲が良いのは良い事だが、あまり虐めるのは虐待と言っただぞ？」

「あら。違っわ。これは躰よ」

不憫に思ったらしいガンダルフに、キヤルはにつこりと、『児童虐待で捕まった母親が良く言うセリフ』を口にした。

「僕、もう躰られるような年齢じゃないんだから、止めて欲しいんですけどね……」

八百年を超える齢を重ねた聖剣が、泣きながらそんな事をぽつりと言った。

「ふむ。通行証か。分かった。すぐに用意させよう。あとは、」
「わたしとセインの新しい服と、お薬と保存食！」

「それも、今日中に町の服屋と雑貨屋を呼んでやろう。好きにするが良い」
「やった！」

涙目のセインを置いて、交渉は成功したらしい。

「まあ、そういう事で、今夜はこちらにお世話になるよ。良いかい？」

セインがラオセナルに訊ねれば、老紳士は頷いて、気遣うように微笑んでくれる。

「承知いたしました。それでは、私もここに泊まりましょう」
「え？ラオももいてくれるの？」

思わぬ申し出は心強いが、彼には屋敷がある。

「ご心配はいりません。我が家には優秀な執事がおりますからな」
言われてみればそうだった。

城に泊まるつもりなぞ更々なかったセインとキヤルは、オズワルドの家に泊まるつもりもなく、初めはホテルを取るつもりでいた。しかし、オズワルド家に到着した時点で、あの執事は彼らの宿泊準備を終えてしまっていた。

掃除はもちろん、ベッドメイクから食事の準備まで手配されてしまえば、嫌とも言えず。

主人であるラオセナルが、セインとキヤルが王都へ戻って来る事を知り、楽しみにしていた事もあり、二人が到着する日を計算に入れ、しっかりと準備していたというのだから、オズワルド家執事アルフォードの敏腕っぷりは目を見張るものがある。

「あー、君の屋敷の使用人たちには、悪いことしちゃったな。せつかく準備を整えてくれていたのに」

「いいえ。セイン様は何も気になさらなくて良いのですよ。メイドの心のこもった掃除の行き届いた部屋が無駄になろうと、料理長が張り切って昨夜から作っている料理が無駄になろうと。悪いのはすべて国王陛下ですから」

にっこりと、セインを気遣いながら、ガンダルフ王へと微笑んだラオセナルだったが、その声は刺を持ってしっかりと怒っていた。

「う。じゃ、じゃあ、明日！明日は僕ら、オズワルドにお世話になるよ！ねえ？キヤル？」

「うんうん！そうね！楽しみだわ！」

慌てて急遽予定を変更するセインとキヤルだった。

「おや。だから、おふた方は気になさらなくても良いですよ。こ

の借りは国王陛下にきつちりと払って頂きますから」

「いやいや。それはそれでやってもらって構わないけど、僕らちゃんとアルにも挨拶出来なかったし、屋敷のみんなにはお世話になっているのに、このまま別れて旅に出るのはちよっとね」

「そうね。わたしも、メイド長のお話好きよ。また聞きたいわ」

あくまで、責任はガンダルフに取らせるつもりらしい。

普通なら、国王がこうして一貴族の使用人の苦勞を台無しにしようが、咎められることなどあり得ないのだが、この三人にはそんな常識は通用しない。

人類は、皆平等に怒られる時は怒られるべきなのだ。

「予はそんなに悪者か？」

「そついう問題じゃありません」

きつぱりと、ラオセナルに突き放されたガンダルフは、気にしてはいない顔をして、肩を竦めてみせた。

「誰かいる!」

そのまま側仕えの補佐官を呼びつけると、三人をそれぞれの部屋へ案内するように言いつける。

それは客人として扱うと申し出たのはガンダルフなのだから良いのだが、軍人らしくかつちりとした物腰の補佐官に促され、キヤルとラオセナルと共に執務室を退室しようとするセインに向け、口の端を吊り上げた。

所謂、人の悪い笑み、というものだ。

「今夜は舞踏会がある。晩餐会には出ずとも、そちらには出てもら
うぞ」

それだけ言い置いて、今度はいつもの人懐こい笑みを見せる。

セインは一瞬、眉を寄せて不機嫌を隠さなかったが、了承の視線
だけを国王に向けて、そのまま部屋を出ていった。

室内に独り残ったガンダルフ王は、実に楽しそうに、手元のカッ
プに残された残りのコーヒーを飲み干す。

冷めてはいたものの、仄かな甘みと苦みが絶妙で、独特の良い香
りも相まって、王は満足げに頷いたのだった。

「じつじつ暮らしたくないね

それぞれの部屋に着いてみれば、準備よろしく使用人が待機しており、かいがいしく世話をしてくれるので、慣れないキヤルは広い室内であるのに、所狭しと逃げ回っていた。

「いいってば！一人で出来るから！」

湯浴みをさせてくれるのはありがたいが、体くらい自分で洗えるのに、髪を洗うのも体を拭くのも全部、使用人がやると言うのだ。

お風呂に入りたくないわけではない。そこはキヤルだって女の子。身ぎれいにするのは大好きだ。

しかし、それとこれとは話が別で、人にお世話をされてお風呂に入るなど、それはとんでもなく恥ずかしい。

だって、まるで何も出来ない赤ん坊みたいではないか。

「いけません！大人しくなさって下さいまし、お嬢様！」

「お嬢様じゃないもの！王族でも貴族でもないから一般人だもん！」

「王様のお客様でいらっしやる以上、お一人でご入浴するのはなりません！」

こんな調子で、部屋中をどたばた走り回っている。

様子を見に来たセインの背後に逃げ込んで、がっしりとしがみ付

くものだから、見かねたセインが、どうやら本日のカール付けの世話人に選ばれたらしい、少々ふくよかな女性に苦笑して見せた。

「すみません、僕ら、本当に貴族や王族の、そういう習慣には慣れていないのです。申し訳ありませんが、入浴だけは彼女の好きにさせてやって頂けませんか？これで時間が無くなつては、貴女もお仕事にならないと思いますし」

たしかに、逃げ回るカールを追いかけて、彼女は既に汗だくだ。それに、彼女の仕事の時間が押し迫っているのも事実だった。

「・・・分かりましたわ。では、お洋服をご用意させていただくのは構いませんわね？」

どうしたって世話をしなければ、彼女の仕事にならないらしい。

しかし、そう言った彼女の頬が、心なしか赤いのは、カールを追いかけて走りまわったからだけではなさそうだ。実際、渋々といった体で承諾はしてくれたものの、視線はちらちらとセインを追いかけている。

「ありがとうございます」

にこりと微笑んでやれば、ぼん、と音が出そうなくらいに顔を真っ赤にして、

「では、後ほど失礼いたします」

と言い置いて、パタパタと部屋を出ていった。

「ありがとセイン。やっとゆっくりできるわ」

「どういたしまして」

セインがくすくすと笑いながら、部屋を見渡すと、備え付けられた大きな衝立の裏にバスタブが運ばれて、お湯が準備されていた。

腕まくりをすると、慣れたように樽の中のお湯をバスタブに移し、湯の加減をみる。

「うん。ちょうど良いかな」

一人納得して頷くと、くるりとキヤルに振り返った。

「キヤル、こっちであったまって、体洗って。で、こっちのお湯で石鹸を落としてくれればいから。タオルはあるの？」

バスタブと、残り湯の入った大きな桶とを指して、入浴の仕方を説明する。

室内で入浴なぞ、普通経験しないものだが、湯船など個人の家になかったところは、大衆浴場に行くか、こうして大きな桶やバスタブなどに湯を張って入浴したものだ。

その習慣が、まだ王侯貴族には残っているらしい。

「お風呂に入るのはいいけど、セインは何してるのよ？」

キヤルが不思議そうにセインを睨む。

「僕もお風呂に入れて言われたから、実は逃げてきたの」

あはは、と笑った。

げし！

「痛った！」

足を踏まれて、セインが飛び上がる。

「あたし、不潔な男は嫌いよ！」

「ちょ、待ってよ。僕だって不潔なのはイヤだよ」

「じゃあ、何で逃げて来てんのよ!？」

「決まってるじゃないか、キヤルが逃げ回っていたのと同じ理由だよ!」

「……あら」

なるほど、それは逃げる。

「ひどいよ!」

「わ、悪かったわね。でも、セインなら、さっきみたいにうまく口車に乗せて追い出せるのじゃないの?」

涙目で足を押さえて抗議するセインに、キヤルは気まぎれになりな

がら、入浴の準備を始める。

「口車って、事実を言っただけなのにひどいなあ。それに、相手が男だったんだよ。男が男に入浴を手伝ってもらうなんて！あり得ないし！力技で風呂桶に放り込もうとするんだもの。さすがに逃げるよ、僕だって」

キヤルがぼかんと口を開けた。

「あんだ、結構大変ね・・・」

哀れむような視線を向けられて、セインも必要以上にしょぼくれた。

「改めて言われると、うう。凹む」

がつくりと肩を落とした。

「とにかく、キヤルはお風呂に入っちゃいなよ」

がさごそと、キヤルの靴を開けて、セインがキヤルの着替えやらタオルやらを用意し出すと、キヤルはキヤルで、ぽいぽいと汚れた服を脱ぎ出す。

「じゃー！遠慮なく！」

セインが背中を向けているのを良いことに、とつとつ服を脱ぎ散らかして、どぼんと湯船に浸かった。

「んーっ！生きかえるわ！！」

実に嬉しそうな声を上げる。

「いっそのこと、セインも入っちゃおう？」

「えー？だつて僕が入っちゃったら、たぶんキヤルの分のお湯が無くなるよ？それに狭いし」

たしかに、今キヤルが入っている湯船は、子供用のもので、長身のセインには小さすぎるだろう。

そんな会話をしていると、こんこん、とノックの音が響いた。

「失礼いたします。お着替えをお持ちしました」

先ほどの使用人とは違い、丁寧ながら迫力のある声だ。

「どうぞ」

キヤルが促すと、声の主はあのふくよかな彼女ではなく、細身の年配の女性だった。

どうやら手ごわい相手と見込んだらしい。

最初の女性と交替したのだろう。柔らかい物腰とは裏腹に、もの言わせぬ迫力がある年配の新しい世話人は、手にボルドー色のドレスと、それから様々な小物を持ったほかの侍女三名を従えて、ぞろりと入室した。

「ご入浴はお済みですか？」

にっこりと微笑まれる。

「もう少し待っていたただける？」

キヤルもにっこりと微笑む。

「かしこまりました。では、お着替えの準備をさせていただきます」
少し、彼女の口元がひきつっていたのは、見間違いではなさそう
だ。

侍女たちに指示を出しながら、彼女はくるりとセインを振り向い
た。

「セイン様でよろしいですわね？」

「ええ。セインは僕です」

名を訪ねられ、頷くと、彼女も頷いた。

「あなた様の部屋付きの者が、探していますわ」

それは、部屋に戻れ、ということだ。

「……あー、分かりました」

「よろしくお願ひします」

さらになっこりと微笑まれ、セインはキヤルの鞆をさっと整理し

て、パタンと閉めると、重い腰を持ち上げた。

「じゃあ、キヤル。僕部屋に戻るから」

衝立の向こうで、ばしゃばしゃと風呂を堪能しているキヤルに呼びかけると、

「がんばってねー!」

気楽な声が返ってきた。

「・・・君もね?」

「まかしといて!」

何を任せればいいのかは、とりあえず聞かないでおくことにして、セインは侍女たちに小さく頭を下げてキヤルの部屋を出ると、気のせいか、重たい足を引きずりながら、自分にあてがわれた部屋へと赴いた。

そこで、やはり待ちかまえていた侍従といる格闘し、やっと一人で風呂に入る権利を得たのは、持ち込まれた湯がずいぶんと温くなってからのことだった。

しばらくして、二人ともガンダルフが用意した正装に身を包み、ぐったりとうなだれながらラオセナルの部屋で、テーブルの上に向かって伏していた。

「うう、なんなのこれ」

「疲れたー」

ぼやく二人の目の前に、ことりことりと、紅茶のカップが並べられる。

「ハーブティーを、侍女の方に淹れていただきました。スッキリすると思いますよ」

顔を上げると、ラオセナルの笑顔があった。

「うう、ラオー」

「おじいちゃん」

二人にすり寄られて、ラオセナルが慌てて体勢を整える。

「危ないですよ？」

大きな大人と小さな子供の二人分の体重を支え、ラオセナルは椅子に座ったまま、飲みにくそうにティーカップを傾けた。

「どうして身分が高い人たちっていうのは、自分でやればできる事も、自分でやらないのかしら」

「ふむ。それは、やってしまうと使用人の仕事が無くなってしまっからでしょうなあ」

ちよつと考えてから、ラオセナルがキャルの疑問に答えを出すと、セインが疲れた顔を張り付けたまま、頭を斜めにして呟いた。

「あー、それはなんとなく分かる気がする…」

「駄目よセイン、そこで折れちゃ！」

「ええー、だって…」

かつてはセインも貴族のうちの人だった。

思いつきり落ちぶれてはいたけれど、一応、使用人も屋敷にいたので、彼らの仕事はそれなりに理解している。

「まあ、あの当時はここまで何でもかんでもやってもらうって事は無かったような気がするけどねえ」

風呂上りに体を拭くのも、着替えてボタンを掛けるのも、ズボンを穿くのも、靴を履くのも、何から何まで彼らは世話をしようとする。そのたびに、セインもキヤルも逃げ回ったのだった。

「下着はなんとか自分で着れたけどお…」

セインはラオセナルの背中に突っ伏した。

「あとは捕まっちゃって…」

それ以上は言葉にならなかつたらしい。

ラオセナルにしがみついたまま、ぷるぷると震えている。

「セインの髪、今までになく艶々だもんね」

「…君もね。キヤル。物凄いいめかししちゃったね。綺麗だよ」

「セインもね。凄く王族とか貴族っぽいわよ。どこの王子様ですか
って感じだわ」

お互いに、気力も抑揚もなく寝めちぎるのだが、果たしてそれが
本当に寝めているのかどうかは謎だ。

セインは色素の薄い髪の色に合うようにと、男性用の白い髪飾り
を着けられ、何やら複雑に編み込まれてしまっている。これは流石
に侍女の一人がやってくれたらしいが、着ている白い正装は、侍従
に三人がかりで捕まった拳句、無理やり着せられた。

キヤルは、先ほど用意されていたボルドー色のふんわりとしたド
レスだが、ウエストをぎゅぎゅに絞られていて、なかなか苦
しそうだ。髪は、金髪をアップにして花と羽で作った髪飾りで飾ら
れ、良く似合っている。

「お二人とも、良くお似合いですよ」

そう言って、にこりと微笑むラオセナルはと言えば、黒に近い濃
紺色の正装を身にまとい、白い手袋
を嵌め、キヤル曰く。

それはそれは、

「格好良い」

のである。

「キヤルー、ラオばつか褒めてないで、僕はどつなのさ？」

「何よ。さっき言ったとおりよ」

「あれって、褒めてないよね？」

「あら、わかっちゃった？」

「ひーどーいー」

涙目のセインだった。

「もう、さ。僕ら出席なんかしなくても良いんじゃない？」

「そういうわけにもいきません。お分かりでしょうに」

「うう。やだなあ」

分かっているながら、あんな目にあつた後は、気の合う三人でゆっくりとこうしていたい。

一つ大きな溜息を吐くと、セインは椅子に座りなおして、ラオセナルが用意させたお茶を口にした。

晩餐会に出ない代わりに、舞踏会には出席しろというのは、国王ガンダルフ？世直々のお達しである。

あまり、そういう身分だなんだのと気にしない一同ではあったが、一国の王が出席しろというからには、それなりの理由がある。理由

があるなら、それをまず述べよ、と言いたるところだが、ここで本
当に欠席でもして、王の面目をつぶすわけにはいかないだろう。

話によれば、各国からの使者も集まっているのだという。

それだけ、セインロズドという名の聖剣は、影響力が大きいのだ。

復活したという話を、信じようが信じまいが、実在したのかどう
かも分からずとも。こうしてこの国が、王自ら復活祭を執り行い、
多数の国々の使者が、噂話の審議を確かめに、あるいは別の目的を
達成しようと暗躍するために、こぞって押し寄せて来るくらいには。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303u/>

HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN! 5

2011年9月28日05時22分発行